

剣道の発展・空白と秋田にみる剣道

Development and blank of kendo, kendo in AKITA

1K04B249

指導教員

主査 寒川恒夫先生

渡部 有真

副査 杉山千鶴先生

文明とも言える1つの歴史は、第2次世界大戦後、連合国軍(GHQ)の占領下におかれた結果、崩壊の一途を辿る。それは、日本における1つの文化の崩壊であり、その当時の日本人の思想を否定するに値することであったと言っても過言ではないだろう。しかし、その後も剣道の存在は、消えることがなかった。その火は、小さくもしかし確実に燃えていたのだ。

台湾元総統の李登輝氏が、武士道解題という文書を日本の若者向けに出版し、その中で李氏は「日本の武道精神は世界を救う秩序と成り得る」とまで、日本における風習と文化を評価している。他国に評価を受けるほどの武道は、日本人の精神性や民族性を具えたもので、本来日本人が持つ潜在的な能力を、形に具現化しうる最良の手段の1つと言っても過言ではない。例えば日本人が、アメリカ合衆国の国技であるバスケットボールやアメリカンフットボールを行い、それを体得し、アメリカ人と対戦したとする。その差は明確で、潜在的な身体能力のみでアメリカ人に圧倒されてしまうことは言うまでもなく、それは紛れもない事実となる。それを考えれば、潜在能力を具現化しうる最良の手段なのである。その中でも剣道は、日本古来の伝統、すなわち日本刀を用いた剣術は、日本全土を取り巻く文化一洗練された刀法が確立され、新陰流や一刀流などの諸流派に統合された時代において、「刀」という特殊でいて身近な文化を背負った、日本に誇るものの1つであった。

日本では、「スポーツ」とあいまって「武道」が発展し、その日本独特の風潮が現在でも根強く残っている。根強く残るその理由は今日でも不透明

なままであるが、私は日本人がもつ精神性がそれを継続、あるいは伝承しているのではないかと推測する。私の見解としては日本がもつ精神性とは、武士道にみられる定義や、今直受け継がれる、武士道師範の教えがそれそのものであると考える。剣道には、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という言葉があるが全日本剣道連盟により定義付けられたものである。対個人の格闘技の一種としてのみ剣道を考えたならば、このような言葉が生まれないことは明確である。また、剣道は相手がいて初めて成立するため、相手を尊重する心を修養することから、「礼に始まり、礼に終わる」といった言葉も生まれてきた。他を尊ぶことで自尊心をも磨くことのできる精神修養であることを説いた言葉に相違ない。そして、柔道にも同じことが言えるのではないだろうか。柔道は、祖として嘉納治五郎が有名であるが、そのような師範が長年築き上げてきた伝統と精神は、「精力善用」、「自他共栄」といった言葉から認識できる。

このような習性をもった武道は、現代ではそれとは異なり、スポーツにより近い形式になっている。時代とともに、その精神は薄れ、各武道の「ブーム」によって悲惨なまでにそれが無くなりつつある。オリンピックや世界選手権などの公式種目として、位置づけされたことでその内在的価値を見出すことよりも、勝利至上を優先しすぎた結果がそれを希薄にした原因だと私は考える。ゆえに、武道を修行する我々は、それらの歴史を今一度振り返り、そこに存在する確かな価値と概念を認識しなおすことが必要であると考えた。私は幼年から今日まで剣道の修行に励んできたが、確かにデータの

多くは、剣道の勝敗と技術を題材とする文献が多数を占めている。それは、剣道の意義が本来のあべき精神から遠ざかっていることを意味している。私もその剣道界に存在する1人であると同時に、伝統ある従来の剣道の存続を危惧する人間でもある。私は、この格式ある剣道という文化を次世代に伝承したいと考え、わが故郷の秋田における剣道の歴史と重ねて研究したいと考え、その結果を卒業研究にした次第である。

現在の少年剣道人口は確実に激減し、各都道府県の道場も減少して剣道界は沈滞期に入っている。そのような中で、日本人が大切にしてきた文化「剣道」の本質を改めて振り返りたいと私は考える。尚、卒業研究にあたり、秋田県湯沢市立湯沢図書館の関係者各位、フィールドワークの折に情報提供等ご尽力くださった方々にこの場をお借りして感謝の意を表したい。